

幕府は、板倉重昌を大将にして九州地方の諸大名を中心に3回の総攻撃を行いました。失敗して重昌は戦死します。ことの重大さに驚いた幕府は、松平信綱を急いで派遣し鎮圧に努めますが、なかなか終結しません。信綱は、軍議を開き、各大名の意見を聞きました。そのとき、大名格で軍議に加わることを許されていた一成は、度重なる戦いの体験を踏まえて「兵糧攻めが最善の策」と進言します。信綱は、この策を取り入れる一方で、やぐらを組み、地下道を掘るとともに、海上から軍船の砲撃を行いました。領民たちは、原城に88日間こもって戦っていました。しかし、ついに食料・弾薬とも尽き果て、寛永15年（1638）2月28日、幕府軍の総攻撃を受け、天草四郎時貞をはじめ約3万7000人の領民が戦死しました。子どもや女性、お年寄りもすべて殺され、戦いが終結します。福岡藩は先陣に立ち、一成も家臣団を引き連れ壮烈な戦いを繰り広げました。この戦いで、家臣団から4人の戦死者を出しました。後に歴史家は、島原の乱のことを「苛酷に始まり、迫害に終わった」といっています。

○業績と教訓

一成は、知行領地の神社仏閣の建立に力を注ぎました。元和年間（1615～1623）、知行地の交通の中核である三奈木の小高い茶臼山（元山城跡）に、清岩禪寺を建て禅宗の教を広めています。また、寛永4年（1627）、兵火にかかり、社殿、家宝などすべて焼失した春日神社（現在の春日市にあり、一成の飛び地）の復興を、藩主長政から命じられ、見事に再建しています。秋月氏時代は、神職、社僧36人を有し、村民の心のよりどころであった美奈宜神社は、秀吉の九州征伐のとき、ことごとく破壊され、数十年間、放置されていました。一成はこれを嘆き、寛永16年（1639年）に再建し、記念に銀杏を植えたのです。銀杏は現在、大樹となり、神木として、夏は緑、秋は黄葉となり、歴史を秘めて美しい景色を醸しだし、三奈木のシンボルになっています。人材確保の面から見逃すことができないことがあります。長政から蟻城、田島（現在の金川）に2000石の知行を与えられていた新免伊賀守（家臣に宮本武蔵の父で、槍術の達人・宮本無二之丞がいる）が、故あって家禄を召し上げられ細川藩に頼ろうとしました。このとき一成は、その才能を惜しみ客分として招き、その後、新免家は家臣として幕末まで一成に仕えました。武術にも力を入れました。嫡子・一任を通して帝釈寺（荷原）走下に鉄砲隊を組織し、隊員には夢想権之助が創始した「神道夢想流杖術（藩外不出の御留武術）」を会得させ、強力な武士集団を組織し、いざ事あるときに備えています。三奈木黒田家は、初代黒田一成から福岡藩の筆頭家老（後に大老となる）として、幕末まで約260余年間続きました。その理由は、黒田宗家孝高が加藤重徳に命を救われたことはもちろん、美奈宜神社の山門にかかる額「至誠」に、三奈木黒田家の精神を読み取ることができます。武将としてその名を歴史に刻み、詩歌も愛した一成は、明暦2年（1656）11月、86歳の生涯を閉じ、崇福寺（福岡市）と清岩禪寺に静かに眠っています。

官兵衛の信頼厚き筆頭家老 栗山備後利安



▲栗山備後利安（福岡市博物館所蔵）

栗山備後利安は播磨の名族赤松氏の出といわれています。始めの名を善助といい、のち四郎右衛門と改め、黒田家の重臣に列して、備後利安と名乗っています。天文19年（1551）の生まれで、永禄8年（1565）15歳にして姫路城主小寺官兵衛（後の黒田官兵衛）の家臣となっています。幾多の合戦に戦功を挙げていますが、摂州伊丹の有岡城に主君官兵衛が捕らえられ幽閉されるという事件が起きた時、栗山備後利安は一命を賭して主君の救出を図っています。この時、後年黒田家の主席家老として重きをなす基礎が作られたものと思われる。黒田長政の筑前入国と同時に1万8000石を与えられて、上座郡麻氏良の城を預けられました。慶長9年（1604）如水が没するとき特に枕辺近く招かれて長政の後事を託され、上豊後の戦陣に着用した合子の兜及び唐草おどしの鎧を贈られています。備後利安は同年自分の領地志波村（現朝倉市杷木志波）に一寺を建立し、如水の法号をとって寺号とし、龍光山円清寺と名づけ主人の冥福を祈りました。

黒田官兵衛に仕えた、「黒田二十四騎」とは

黒田家草創期に活躍した家臣から、代表的な24人を選び、後に「黒田二十四騎」と謳われる精鋭たちが、黒田官兵衛に仕えていました。強者ぞろい、その武功が伝えられています。

■黒田二十四騎

井上之房／小河信章／菅正利／衣笠景延／桐山丹齋／久野重勝／黒田一成／栗山利安／黒田利高／黒田利則／黒田直之／毛屋武久／後藤基次／竹森次貞／野口一成／野村祐勝／林直利／原種良／堀定則／益田正親／三宅家義／村田吉次／母里友信／吉田長利（50音順）



▲黒田二十四騎（福岡市博物館所蔵）

黒田52万石を救った栗山大膳



▲栗山大膳画像（市指定文化財：円清寺蔵）

世に知られている「黒田騒動」は、元和9年（1623）長政没後から始まります。新藩主になった忠之のわがままは治まらず、家臣をむやみに打ち叩いたり、近臣を集めては毎日酒宴におぼれ、剛健・質素の家風は忘れられていきます。大膳をはじめ藩の重臣たちが忠之に何度諫言してもとりあってもらえず、藩政は険悪な状況になっていきました。忠之は、幕府が最も嫌う軍船を建造し幕府のとがめを受けます。大膳などの謝罪で事なきを得ましたが、忠之の乱行は治まりません。忠之は、領主になる前から小姓として仕えていた倉八十太夫をかわいがり、食禄は加増を重ね9000石にまで取り立てています。さらに、重臣のだれにも相談なしに十太夫を家老にし、十太夫の権威は藩随一になります。忠之のわがままは益々ひどくなり、藩の乱れは承知しながらも藩の重臣たちも口をつぐみます。諫言をなすのは大膳のみとなり、諫言してもしりぞけられ続けました。忠之は、独断で新規に足軽200人を抱え、一銃隊を編成して十太夫につけます。この時代、大名が城郭を補強・修理したり士卒を雇い入れたりすることは禁止されていて、幕府による藩取り潰しの口実にされかねない出来事です。大膳は、若輩の十太夫に頭をさげ、諫言書を藩主忠之に届けるよう依頼します。十太夫はこれを握りつぶし、大膳の悪口を言いつけて忠之をたきつけます。こうして忠之と大膳の間には修復できない亀裂が生じてしまいます。忠之は大膳の殺害を口にしますが、大膳は職を退いて杷木志波の邸に帰り、藩をつぶすことなく急場を乗り切る方法を考えていました。寛永9年（1632）6月、大膳は九州大名の総目付け日田代官・竹中采女正に「藩主に反逆の企てあり」との訴状を差し出します。これは、裁きの庭で長政と家康の関係を幕府高官に再確認させることが目的で、自身は「主に対する反逆の罪」に問われることを覚悟しての行動でした。思惑どおり寛永10年（1633）3月、大膳は裁きの庭で諸老中を前に「御老中の御威光による御意見をいただく以外には、主・忠之をして神君・家康公の御厚志を守り通さず方法見当たらず公訴の手段をとりました。家康公の御意思をふみにじってはなりません」と釘をさしています。大膳の命をかけた訴えによって、次のような幕府の評定が出されました。「治世不行き届きにつき、筑前の領地は召し上げる。ただし、父・長政の忠勤戦功に対し特別に旧領をそのまま与える。」「大膳は主君を直訴した罪で奥州盛岡に配流。150人扶持を生涯与える。」こうして黒田藩はとりつぶしを免れ、その後忠之は島原の乱や長崎警護の任で活躍し、城下町の賑わいのために尽力しています。大膳は、盛岡で罪人あつかいされることなく、62歳で生涯を終えました。お墓は岩手県盛岡市にあります。

○栗山大膳の業績など

大膳は、遠賀川流域の洪水調整や灌漑、水運を目的に、遠賀川から洞海湾に通じる堀川の工事を元和7年（1621）に着工しています。長政の死によって中断しましたが、128年後の宝暦元年（1751）に再開し、宝暦12年（1762）に完成しています。灌漑用水として田畑を潤し、物資の輸送路としても活用されました。全長約12.5kmで「大膳堀」と呼ばれています。松末地区の杷木星丸にある「野手八幡宮」の元宮は杷木林田にあり、宇佐八幡の神領で、寛永7年（1630）に大膳が宇佐八幡宮を勧請したもので、貞享3年（1686）に現在の地に遷宮しています。国道386号線沿い香山入り口に「大膳楠」があります。昔、この楠の木の側に大きな池があり、「大亀が住んでいて旅人を襲うので退治して欲しい」と村人から願いが出されます。一方、別の村人からは「あの亀は村の守り神だから殺さないで」と頼まれます。現場に出向いた大膳は、池中央の岩の上で甲羅干しをしている牛ほどもある大亀が長い首を出しにらみ付けるのを見て、鉄砲で殺してしまいました。とたんに黒雲が一面を覆って激しい雨が降り、地面が揺れて香山の半分が崩れ落ちたため、大膳はほうほうのいで逃げ帰りました。そのかけ崩れで、民家も池も埋もれてしまいましたが、楠の木は残りました。地元の人はこの楠を「大膳楠」と呼び、かけ崩れのことを「大膳崩れ」と呼んでいたと、そんな話が伝わっています。



▲堀川の工事（水巻町教育委員会提供）



▲大膳追悼碑（円清寺）